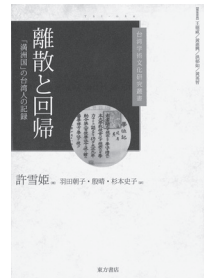


許雪姬著 羽田朝子・殷晴・杉本史子訳

離散と回帰

——「満洲国」の台湾人の記録

東方書店／2021年6月／616頁／8000円＋税



駒込 武

長年にわたり中央研究院台湾史研究所の所長として台湾史研究の深化発展に尽力されてきた許雪姬教授が、「台湾学術研究文化叢書」の一環としてずっしりと重たい本を出版された。六〇〇頁に及ぶ大著はモノとしても重たいのだが、著者が二〇年あまりをかけて浮き彫りにした事実はさらに重たい。

本書がとりあげているのは、戦前期に「満洲」（中国東北地域）に渡った台湾人である。ここで台湾人とは、一八九七年の「台湾住民国籍決定」で日本国籍を選んだ人々とその子孫というように操作的に定義されている。台湾から日本国内の別の植民地に離散した人びとは日本帝国の瓦解とともにいったん「故郷」台湾に回帰する。だが、過酷な現実と直面して再び世界に離散していった者も少なくなかった。「離散」と「回帰」が本書の主題となる所以である。

まず本書の章立てを確認しておくこと次の通りである。

はじめに

第一章 概論

第二章 台湾人の「満洲経験」

第三章 満洲で教育を受けた台湾人

第四章 満洲国官僚体系の建設と台湾人官僚

第五章 非公職の台湾人、満洲における台湾人の生活

第六章 満洲にいた台湾人医師

第七章 台湾人の満洲における戦争体験

第八章 満洲経験者のその後の境遇と二度目の離散

第九章 結論

台湾人と満洲とのかわりについて、たとえば代駐日満洲国全権大使だった謝介石が台湾出身であることは、評者も知ってはいいた。だが、謝介石のような人物は例外的なケースなのだろうと勝手に思い込んでいた。本書が示しているのはむしろ謝介石のような存在が氷山の一角に過ぎないこと、すなわち少なくとも三〇〇〇人を超える台湾人が満洲に渡り、

満洲国の高等官、医師、エンジニア、大学教授など社会的に影響力ある地位を占めていたことである。

さらにまた、満洲国成立以前から、奉天（瀋陽）に設立された南満医学堂（のちに満洲医科大学）など高等教育機関で学ぶために満洲に渡った者が少なくないことも明らかにしている。当時の台湾における高等教育機関が質・量ともに貧弱だったために日本内地に留学した者が多いことこそ知ってはいいたものの、台湾から満洲への留学は評者の眼中にまったく入っていなかったのが驚きだった。かりに満洲における学生・生徒の名簿を入手できたとしても、名前を見ただけでは台湾出身か中国大陸出身か見分けが付かないという事情がそこに作用していたこともあらためて自覚させられた。

本書では第二章で満洲国建国以前の時期に遡りながら台湾人が満洲へと越境した理由を検討したうえで、第三章では満洲で教育を受けた台湾人、第四章では満洲国の官僚や軍人、第五章では南満洲鉄道や満洲重工業開発のような国営会社・

特殊会社の社員、第六章では医師というようにそれぞれの活動分野にしたがって分けて満洲における膨大な台湾人の存在を浮かび上がらせ、満洲という空間が台湾人に開かれた社会的上昇移動の数少ないルートのひとつだったことを実証している。

こうした事実を記述するにあたって、本書では膨大な文献資料が博搜されている。例えば遼寧省檔案館所蔵「南満医学堂卒業生学籍簿」ひとつをとっても、評者にとっては驚きだった。一九九〇年代前半のことだが、そのような資料を見つけ出そうとして遼寧省檔案館を何度か訪問しながら、ついに辿り着けなかった記憶があるからである。さらに、著者が中心となって積み重ねてきた口述歴史（オーラル・ヒストリー）が縦横無尽に利用されてもいる。本書に登場する満洲の台湾人の大多数はこれまでの歴史記述で着目されることのなかった、ほとんど無名の存在である。しかし著者はあたかもひとりひとりの墓碑銘を刻むかのように、それぞれの生の重みに向き合いなが

ら、固有名詞を丁寧にも本書に刻み込んでいく。真に驚嘆すべきは資料の博搜それ自体というよりも、無名の人びとの足跡をどこまでも追及しようとする著者の意志であり、研究者としての執念ともいべきものである。

第七章では「台湾人の満洲における競争体験」、第八章では「満洲経験者のその後の境遇と二度目の離散」が描かれる。満洲国における台湾人は、日本敗戦後、台湾へと帰還する道において日本語を話してはならず、北京語は話せないことが多かった。福建語や客家語は中国東北の人々に通じなかった。そのため、口をつぐむしかなかったという。運よく無事に台湾にたどり着けたとしても「漢奸」や「戦犯」として政治的な粛清の対象とされた者が少なくなく、二・二八事件や白色テロで受難した台湾人の中で満洲出身者の占める割合が高かったことが明確にされる。例えば、一九四八年の「愛国青年会事件」では台湾の自治・独立を求める運動を展開した嫌疑で多数の若者が逮捕・投獄されたが、その中に

は満洲国の最高学府たる建国大学の同窓生が少なからず含まれていた。さらに、国民党統治の強権性と台湾の世界的孤立が露わになるのにもなつて、日本、カナダ、アメリカなどへの「再度の離散」も生じたことが明らかにされる。

本書の日本語版の副題は「満洲国」の台湾人の記録」だが、中国語版（未公開）の副題を直訳すると「台湾と「満洲国」の狭間における台湾人」となる。おそらく日本語版ではわかりやすい表現を採用したのだろうが、第七章・第八章に記された事実の重みを考えると、「どこにも安住の地はない」というニュアンスを伝える中国語版の副題の方が本書の奥行きを正確に表現しているように感じられた。

本書の意義として、単に歴史の空白を埋めるものではなく、歴史認識をめぐる何重ものタブーを打ち破ろうとするものであることを第一に指摘すべきだろう。あらためて指摘するまでもなく、戦後台湾における「国史」とは中国史であり、近現代の台湾史研究そのものが長期間に

わたってタブーとされてきた。さらに「偽満（洲国）」の歴史は中国歴史学界におけるタブーであり、「はじめに」で記している通り、「偽満（洲国）」の歴史を探究することは「中国国民党も中国共産党も喜ばない」ものだった。戦後日本では元満洲国官僚のノスタルジアを発散するための歴史叙述と、「偽満」として抽象的に批判する歴史叙述が交わらないままに平行して存在してきた。つまり、本書でとりあげた歴史は、台湾、中国、日本それぞれの地域で長期にわたってタブー領域を構成してきた。一九九〇年代になってようやく山室信一らが実証性を持ちながら、しかも批判性も備えた満洲国史研究を打ち出した。著者の仕事は山室らの研究の流れを継承しながら、それをさらに一歩も二歩も先に進めようとするものである。

本書の意義として第二に指摘すべきは、「離散と回帰」をめぐる経験を台湾だけにかかわるものとしてではなく、世界史に普遍的な問題として捉えようとしていることである。第一章では、植民地

政府の拡張とともに被植民者が異郷で交易を展開するような事態を「補助者ディアシポラ」(auxiliary diaspora)という概念でとらえ、イギリス領東アフリカにおけるインド人の経験と「満洲国」における台湾人の経験を、同一の平面で捉えようとしている。この指摘は「植民地」とは何かという問題の複雑さを開示するものである。

かつてベネディクト・アンダーソンは、「ラセンの上昇路」という言葉で社会的上昇移動のルートを表現し、この「ラセンの上昇路」が開かれているか否かが植民地とそうではない地域を分けるメルクマルルだとして、次のように述べた。「スコットランド人政治家は立法のために南部へ行き、スコットランド人実業家はロンドンの市場に自由に参入することができた」。にもかかわらず、英領インド出身者にとって「一八世紀のスコットランド人にはなお開かれていたあのラセンの上昇路はもう閉ざされていた」(ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同

体』NTT出版、一九九七年、一五二—一五七頁)。実際、台湾から日本本土への「ラセンの上昇路」は完全に閉ざされていたわけではないとしても、限定的であった。そのことは、評者も拙著『世界史のなかの台湾植民地支配』(岩波書店、二〇一五年)で論じたことがある。ところが、本書ではいわば「斜め上へのラセンの上昇路」があったことを明らかにしている。植民地宗主国の中心に向かってではなく、同じ宗主国の別の植民地という「斜め上」の方角ならば「ラセンの上昇路」はかなり開かれていたということである。そういえば、「インド独立運動の父」とされるガンジーも、ロンドンで法律を学んだ後で、英領南アフリカ連邦で弁護士開業したのだった。さらに、日本の場合、「内国植民地」ともいふべき沖縄や奄美の人びとが台湾や南洋群島では植民者として優越的な地位にあったことも思い起こされた。植民者と被植民者の関係は何重もの入れ子構造になっている。近現代の「世界史」を考える作業は、この植民—被植民をめぐる複

雑な入れ子構造を解きほぐすところから始めるほかないと思ひ知らされた。

本書を読んでいて疑問に感じるところがなかったわけではない。例えば、第一章冒頭の次のような文章である。

「日本統治期の満洲国の台湾人というテーマを研究するにあたり、最も悩ましいのは立場の問題であった。

それは被植民者を日本人の勢力の下で虎の威を借り、漢奸の道を選んだとして譴責するのか、それとも台湾で活路が開ざされた被植民者がどのように努力し新天地で成功したのかについて、実事求是の態度でもって客観的に記述するのかわかることである。」(一頁)

このあとに「私が選択したのは後者」であるという文章が続く。評者は最初はこの文章を読んだ時に驚いた。

「道徳的な譴責」と「客観的な記述」という対立軸で後者を選ぶということは理解できる。あまりにも道徳的な評価が先行しすぎて、歴史的な事実それ自体の解明がおろそかにされる傾向が存在して

きたのは確かだからである。そのことは、かつて瀋陽などで「偽滿」の歴史にかかわる研究会に参加した評者の経験からもその通りと思われた。

評者が躓いてしまったのは「新天地で成功」という表現である。このように表現してしまつてよいのかという疑問を心の片隅に置きながら、本書を読み進めた。最後まで読み終わって感じたのは、著者による冒頭の言明に反して、本書全体を通じて浮かび上がるのは、決して単純なサクセス・ストーリーではないということである。むしろ部分的・一時的な「成功」はあったとしても、「離散と回帰」の狭間で宙づりにされる人々の懊悩や苦悶が浮き彫りとなる。その懊悩や苦悶を知り尽くしているからこそ、著者は「次に登場するのは、こんなにはひどい目にあつた人です」というようにではなく、「次に登場するのは、こんなに努力して成功した人です」とあえて紹介したのではないのか。すなわち、冒頭に置かれた「成功」とは、これまで歴史の表舞台から抹消されてきた人々に再度登場を願

うための、いわば「呪文」のようなものではないか。あるいは評者の勝手な解釈かもしれないが、そのように読み取ることによって冒頭の言明と本書の内容は整合するように感じられた。

その他、気にかかったこととして、当時の台湾の学校制度にかかわる訳語について正確ではないところが散見された。例えば、「経済・工業・農林学校」（七七頁）は「商業・工業・農林学校」と訳すべきであらう。もちろん、これは著者の責任ではない。中国史専攻の訳者たちにとって、それだけ台湾の学校の歴史が疎遠なものであったことの表れであろう。こんなところにも、台湾史と中国史と日本史のタブーに挑戦しながら、三者のあいだを架橋する本書の試みが稀有のものであることが示されているともいえる。

日本の学界では「サバルタン・スタディーズ」とか「ポストコロニアル・スタディーズ」といった言葉が一時流行しては、いつの間にかあまり使われなくなる現象が見られる。本書では、「ディア

スポラ」を別とすれば、これらの「スタディーズ」で用いられてきた述語が登場するわけではない。ただ、これらの「スタディーズ」の問題提起の核心が、本書において実証的厚みのある歴史叙述として受肉しているとみることもできる。その「仕事」の重みに頭を垂れるほかはない。